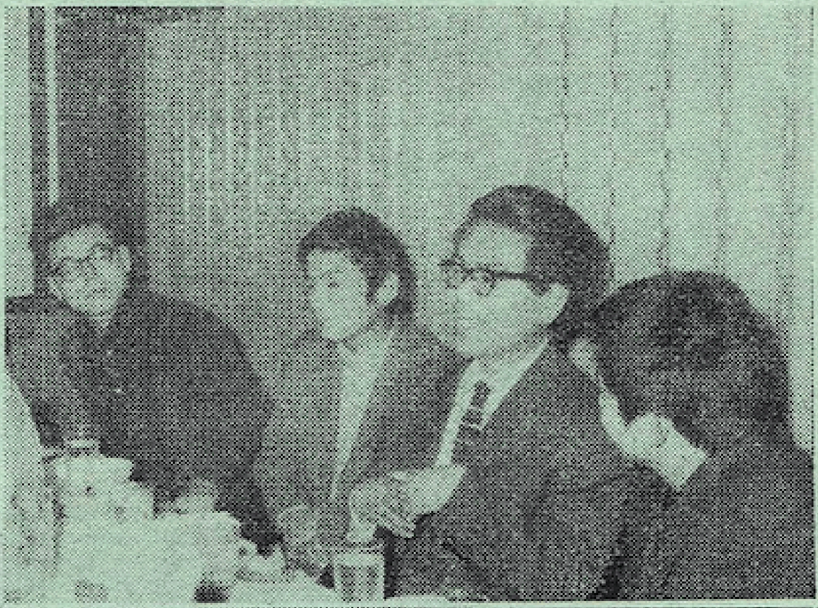
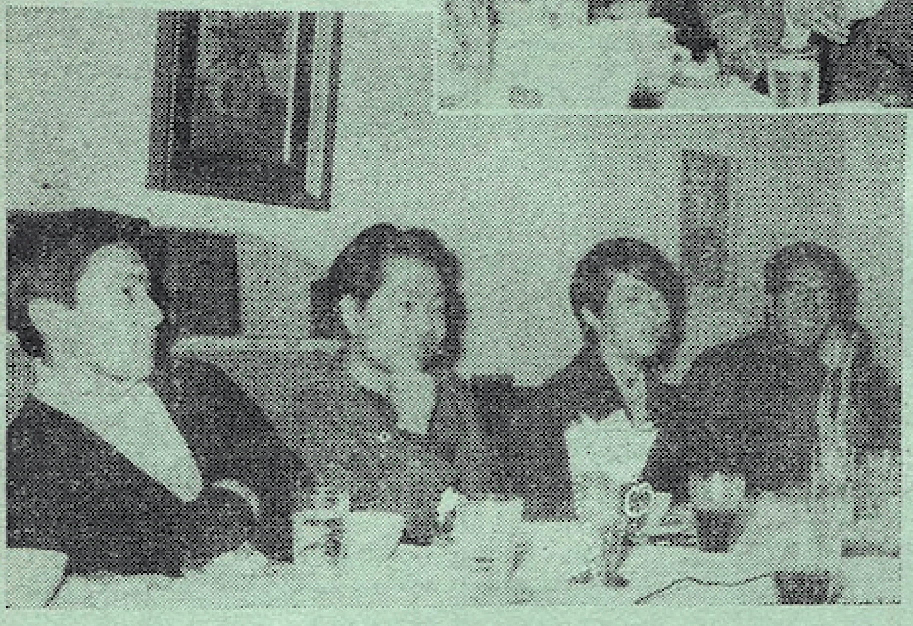
アシスタントとその実状

●まんが月評 ⑥●

現在のまんがブームを支える、一流まんが家の影の協力者、アシスタント。彼らはプロ作家への修業の道を歩んでいるのか、サラリーマンか、その実状は。





■出席者■

（上段右から）
永井　清（石森章太郎）
長谷　邦夫（赤塚不二夫）
末本　栄（川崎のぼる）
小室　保孝（手塚治虫）

（下段右から）
政岡　稔也（ちば・てつや）
村岡　栄一（永島慎二）
尾崎　秀樹（司会）
大竹　豊（貝塚ひろし）

（　）内は出席者が師事するまんが家

尾崎　現在のスター、児童まんが家に一ばん近い所にいて、今日のまんがを生みだしているあなた方アシスタントの実状はどうなのだろうか？　これはまんが家を志す人たちにとって、アシスタントの道を経るということは、プラスかマイナスか？等々の興味深い問題がいくつかあると思われます。それらの点についてみなさん方から、忌憚のない考えや意見を出していただいて、まんがブームの影の演出者でもある、アシスタントの全貌を探ってみたいと思います。

アシスタントへの道

長谷　私の場合、赤塚のアシスタントになるまでには長い道程がありました。

私が、まんがを描きはじめたのは、今から十年以上も前で、そのころ会った最初のまんが家が赤塚だったわけです。そのころ私は勤めをしながら、単行本の世界本をかいていましたが、単行本の世界がだんだん児童まんがの世界から離れていくのに疑問を感じていたわけです

そして赤塚は自分の仕事がふえてきたので、私にアシスタントのまとめをやらないかといってくれたので、この際自分のまんがを一時離れて、人の仕事を見てみようという気もあって、彼のアシスタントになったわけですが。

末本　ぼくは川崎先生のファンだったので、手紙をよくだしていました。ちょうど一年前、川崎先生のアシスタント

の人が一人やめたので、かわりにはいったわけで、タイミングがよかったのかもしれませんね。

小室　ぼくの場合、二年前、元まんが家だった河本長編さんの紹介で、そのころ手塚先生のアシスタント・チーフだった井上智さんに会い、手塚先生のアシスタント、つまり、虫プロの社員として入社したわけですが、現在は嘱託の形で、先生の忙しいときだけ手伝っているわけです。

大竹　ぼくも小学生の頃からまんが気ちがいで、まんが家になろうと思ったとき一ばん心に残っていた作品が、貝塚先生の「クリクリ投手」で、貝塚先生に手紙を書いたら、アシスタントとしてきてくれという返事があり、大よろこびでアシスタントになったわけです。ちょうど四年めになりますね。

アシスタントは影の演出者（尾崎）

永井　ぼくの場合もまんがを描きたい気持でいっぱいだったんですが、やはり大学へ行こうと決心し、予備校へ通ってたんです。だがノートを開くとすぐまんがを描いてしまう。(笑)それで一年半程前『少年サンデー』などに原稿の持ち込みをつづけていたのですが、一度、自分の絵の批評を先生から仰ぎたいと思い、石森先生を訪ねたところアシスタントになれと話があり、現在まで一年半程やっています。

村岡　ぼくは、高校を中退し、家を飛びだし、新聞配達やアニメーションをやったりしてたのですが、一年程前、永島先生が、ぼくといっしょにまんがをやらないかということで、先生のアシスタントをはじめたわけですが、はじめは、アシスタントになろうという意志は全然なかったんです……。

政岡　ぼくは、ちば先生のまんがが好きで、自分でもあんなまんがを描きたいと思ってたとき、たまたま先輩の紹介で、ちば先生に会いアシスタントになったわけです。

尾崎　みなさんそれぞれ、いろんな道を経て現在の仕事にはいったわけですがこれからアシスタントになりたいという人が、先生方に「お願いします」と頼んだだけでアシスタントになれるものかどうか、実状はどうですか。

長谷　赤塚のところには、アシスタント志望者が相当訪ねてきますが、その人たちにいえることは、模写がうまいとかタッチが似ているとかいうよりも、自分の個性的なものが描けるかどうかという問題があると思うんです。ですから、ただまねがうまいとかいうだけでは、うちではアシスタントにはなれませんね。

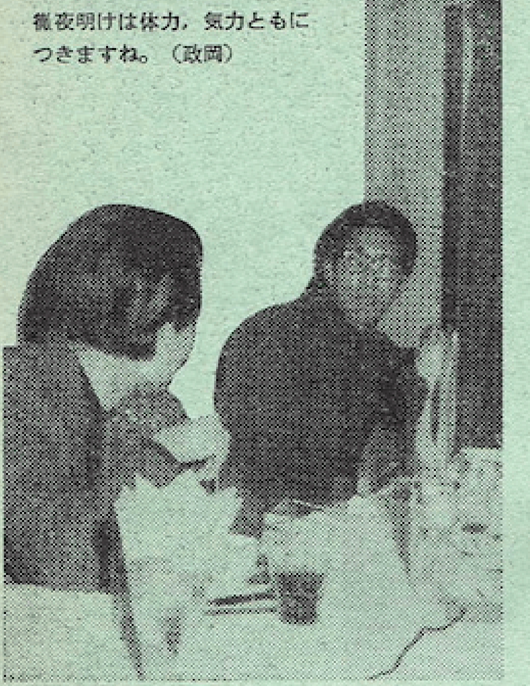
アシスタントは、サラリーマン化してきている

大竹　貝塚先生のアシスタントになるには、もちろん絵が描けなければだめですが、もっと現実的で、人数がたりなくなったとか、もう一人ほしいというタイミングにぶつかればなれるんです

永井　ぼくのいる石森先生の所は、ごぞんじのようにすごく忙しい。だから長つづきする人が少ないため、アシスタントの入れかわりがはげしく、いつでも人がたりない。だからはいりやすいんじゃないですか。それにうちは若い者ばかりなので、若い人の方がよいということがあると思います。

小室　手塚先生の場合、二十年近くまんがを描いてるわけですが、先生はだいたい四年ごとに創作上の一つの壁にぶつかり苦しみぬいて新しい物を生みだしてきたわけで、その転機にアシスタントの顔ぶれが変わっていくという傾向があるわけです。

村岡　永島先生の場合、みんなとちょっとちがうんですね。ただ絵が描けるというだけではなく、作品を残すという意欲に燃えた人を育てようという考えがあるわけです。ですから、ぼくなんかも先生の絵には似ていないですよ。だから、仕事の面では、あまり手伝うところがないんで困ります。(笑)



徹夜明けは体力，気力ともにつきますね。（政岡）

アシスタントの仕事

尾崎　アシスタントの仕事にもいろんな形があり、それは中心になる作家の考え方の違いにもよるようですが、実際の仕事をどのようにやってるんですか

長谷　うちではアシスタントの分業制をとっています。現在では、アイデア部門、絵部門、編集部門、渉外部門に分かれていて、これには各アシスタントが、もっとも得意の部門を受け持つということです。ですから絵の人は、午後一時頃から九時か十時で仕事が終るわけです。アイデアの人は、ふつう昼十二時からアイデアがまとまるまでというように。私の場合現在うちで発行している『おそ松くんブック』の編集と出版社との渉外、それにアイデアを受け持っていますから、十二時から五時までに前の二つの仕事をやり、あとはアイデアをやる時間、それが真夜中の二時、三時になってもやるというわけです。（笑）

永井　うちではアシスタントは一応、バックやベタなんでもやるわけです。それに月の内二十日間はびっしり仕事があるので、先生の家に行ったら戻れないときの方が多いですよ（笑）それに石森先生タフだからね……。（笑）

大竹　うちの場合もなんでもやります。ただ、うちで発行してる『まんがマニア』の編集だけが別です。現在先生の連載は週刊は『少年キング』の「どろぼっ子」と月刊は、『少年ブック』の「1・2作戦」と『希望の友』の「ラッキー9」の計三本なので週二日は完全に休みます。

ほんとに忙しいのは、週刊誌と月刊誌の追い込みが重なったときです。だから先生がネームを入れているときや寝ているときは自分の時間なので、アパートへ帰って、まんがの勉強もできるわけです。

政岡　ちば先生の場合は、週刊誌が『少年マガジン』の「ハリスの旋風」と『少女フレンド』の「みそっかす」の二本ですが、これは下絵を入れて二十時間あれば一本上がります。ぼくは通いですから、住み込みの人よりは時間的余裕があり、勉強の時間はあるんですが、なにしろ徹夜明けは体力、気力ともになくなって……。（笑）

小室　ぼくは、前いわゆるアシスタントというより社員だったので、一月の残業時間は七十時間で打ち切りになり、あとは代休になるんですが、だいたい月百五十時間は楽にオーバーしてます。

それと手塚先生自体仕事をいつはじめるかわからない（笑）真夜中からはじめたり、朝早くからはじめたりするんです。

それに先生はえらくネームをたいせつにする人ですから、最後の一ページになってもなかなかできあがらないときがあるんです。ですから、みんな先生に振り回される状態です。（笑）

プロへの道は根性……

尾崎　まんがブームが高まるにつれ、アシスタントの必要性がますます生じてき、赤塚さんの所のように、分業制をとる所もでてきているわけです。そこで問題になるのは、アシスタントは職業かどうか、作家を志す人にとって得

●現在、一流まんが家は、マスコミの需要を満すため、競ってプロダクション形式をとっている。作家とアシスタントの関係も、一昔前の徒弟的ムードでなくなり、社長と社員という新しい関係のもとに、まんがの大量生産が行なわれている。ここ、赤塚不二夫氏のひきいる、フジオプロもその一つである。

ネーム＝ふきだしの中のセリフや説明文のこと。まんが家は，このネームを決めるまでに案，ストーリーをねる。

か損かということだと思うのですが……

長谷　けっきょく、アシスタントにも二通りあると思います。つまり作家を目ざす人と職業とする人です。うちでも一ぼんかんたんな、ベタをぬる人でも二万円程度の収入があるわけで、職業としても充分成り立つわけです。私はアシスタント志望者によくいうんですが、プロ作家を志すなら、アシスタントになるというのはマイナスだ。アシスタントに徹するなら、自分のテクニックだけを売って、自信を持って、プロとしてのアシスタントになれと……。これからの人は、その点はっきり割り切った方がよいと思いますね。

小室　大体アシスタントになる動機は、自分の好きな先生の元で暮したいという素朴な考えからで、そのうちに自分の才能の限界を知り、アシスタントに徹するという人もかなりいるんじゃないですか？

政岡　ぼくはアシスタントになっても必ずしもプロ作家になるのにマイナスとは思いませんね。仕事が忙しすぎて、自分の勉強ができないというのは、いいわけだと思うんです。仮にぼくたちが、与えられた仕事を立派にやりとげれば、先生に勉強の時間を要求できるし、その意欲がなければ、一人前の作家にはなれないんじゃないかな。

小室　だけどね、先生の方にも問題があると思うね。仮に時間をくれといった場合、自分は、アシスタントをやめる覚悟をしなければならないときもある。

永井　けっきょく、それは個人の意欲というか根性の問題だと思いますね。

長谷　もちろんマイナスといいきることはできないですが、うちでも五人いるアシスタントの内、ギャグをやろうというのはただ一人で、あとはストーリーものをやってる人たちです。アシスタントをやりながら、その先生からなにを学び取り、自分のものにし、作家としての個性をのばしていくかは、個人の意欲とか才能に帰すのは当然です

これからのまんがは，テッサン力が必要（大竹）

しかし、アシスタントがプロ化していくのも現状のまんが界では必要じゃないですか。

尾崎　あなた方は、大体作家を志していらっしゃると思うんですが、自分の作品を生みだすための勉強法はどうですか？

村岡　ぼくの場合、これは永島先生の意見でもあるんですが、まんがに限らず、絵画、映画などを含め、より多くの作品を見るということがたいせつで、そして、多くを描くということにつきると思います。

政岡　ぼくは、ちば先生から教えられたのですが、手のひらにはいるぐらいのメモノートを持って電車に乗り、乗客の表情やポーズをメモすることです。これをぜひ実行したいと思いますね。

[illegible]号から自分の線[illegible]（小室

小室　劇画をやる人は別ですが、まんがに石膏デッサンなどあまり必要じゃないですね。それより好きなまんが家の絵を模写してるうちに、自分自身の一本の線を見つけることが大切だと思いますね。

末本　でも、やらないよりやった方が何かといいんじゃないですか？

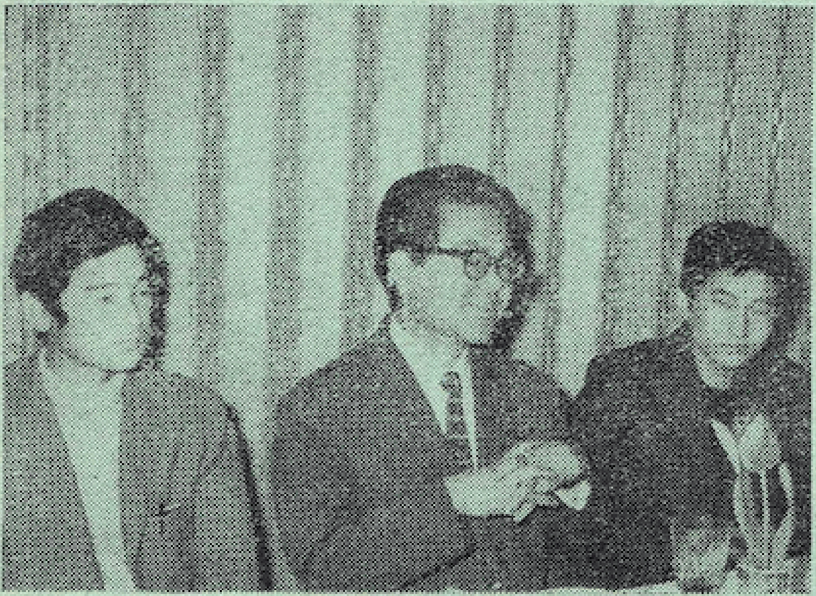
長谷　私は学生当時、油絵や石膏デッサンをやりましたが、まんが家には特に必要とは思いませんね。まんが家には絵画とちがい、下手の魅力みたいなものがあるでしょ。(笑)

大竹　だが、これからは、現状のまんがを打ち破る絵がでてくると思うんです。それはやはり、デッサン力があっての上でだと思うんです。そのためにも描写力が要求されてくることは、まちがいないと思いますね。

まんがブームは危機だ！

尾崎　では、現在の児童まんがブームについて、その中心にいらっしゃるみなさんは、どう考えておられますか。

小室　現在のブームがほんものかどうか疑問ですね。これは多分にテレビまんがブームの上に乗っておこった現象だと思うんです。それだけに現在の児童まんがは危険であり危機だと考えられます。これは手塚先生がいってたことですが、現在の児童まんが家は二つに分けられる。一つは、自分の好きなものだけを描くマニアの一群と、もう一つは、生活のためだけに描く商業作家の一群。だから、ほんとうに子供のためにまんがを描いてる人は少ない。小学館のまんが賞の受賞者がでなかった現実が、それを物語っていると思うんです。



ベテラン作家は今ピークにきている（左より，末本，長谷，永井）

長谷　私も小室くんの説に大体賛成です。現在のブームを分析するとそのブームの主体を支えた作家というのは、ほんの一握りの人たちだと思います。それだけに現在のベテラン作家はいろんな意味でピークにきている。そのため次のものを見つけていい作品をぶつけなければならない時期にきている。これを誰がやるか？　ここに問題があると思うんです。新人にはその意味で今がチャンスだが、それだけの実力と気迫があるかどうか疑問だし、ベテラン作家は仕事に追いかけられ、その結果、われわれアシスタントは、自分の仕事をする時間もない。それだけ、現在のブームはこわさを持ってると思うんです。

分業化の進むプロダクション制

大竹　ブームとは別ですが、先にでたまんが賞自体にも問題があると思います。どうして人気の一ばんある作家がもらえないのか？　また一度もらうと次はもらえないというのも解せないです。

長谷　選考委員の人選と、賞を出す出版社側にも疑問がありますね。

大竹　そう、まんが家全部の投票できめるとか、読者が選考に参加する方法を考えるべきだと思うんですが……。

小室　賞には、出版社の意向が強く、自分の所に載った作品に賞を贈るという商業政策が見える。ほんとうに子供のために描いたよい作品なり作家なりに贈るべきだと思うんです。

長谷　今までの賞を見ると、多分に功労賞的意味が含まれてますね。

流行作家は駄作を描きすぎる……

尾崎　ここで一つ、あなたたちの立場にとらわれず、児童まんが家評定を、ざっくばらんにやってください。

岡村　ぼくは、永島先生と同じくらい石森先生が好きだったんですが、現在、確かに絵はうまいんですが、昔の作品の「おかしなおかしなおかしなあの子」あたりのよさが失われてますね。個性が弱くなったんじゃないですか。

永島先生の場合は、ゴマするわけではないですが「漫画家残酷物語」などほんとうの人間にふれられるというか小説なんかより、ぼくは感動を受けますね。

政岡　なんといっても、ちば、手塚、白土先生の作品がいいですね。ほんとに先生といえるのはこの三人だけじゃないですか。ちば先生のものは現代っ子へアッピールする作品として抜群だと思うし、白土先生の場合は「忍者武芸帳」が、なんといってもまんがの最高傑作の部類にはいると思うんです。まし

て手塚先生は、ぼくから見れば、雲の上の存在で神格化してしまう。(笑)

それから川崎さんのアシスタントがいらっしゃるけど、「アニマル1」は言語同断だと思いますね。あれは大失敗作ですよ。「ハリスの旋風」にあまりにも似すぎている。

末本 先生は「ハリスの旋風」に似ていないかとぼくらに聞くが、ぼくは内容が全然ちがうと思う。「ハリス」は教訓的な所もあるが、ただ暴れ回る要素が強い。「アニマル1」の方が、もっと人間的だと思うんです。だからぼくは同じ川崎先生の作品でも、「巨人の星」よりは好きですね。

村岡 たしかに「アニマル1」が「ハリスの旋風」のまねだとは思いませんね

最近なんだか川崎先生の昔のものが「アニマル1」によって出はじめたと思うんです。

長谷 私は、川崎さんは、オリジナリティのある作家ではなく、いい意味での職人だと思う。他から出たものを吸収し、プロに徹して成長した作家だと思うんです。

大竹 今、永島さんの「漫画家残酷物語」や白土さんの「忍者武芸帳」などが出たのですが、これが一体、児童まんがといえるかどうか疑問ですね。児童まんがをはっきり定義づけるのは、もちろんむずかしいが、小学三、四年生でもわかるものでなくてはね。

永井 白土先生の場合、小さい児童には不親切であると思う。あれを読むのは中学生以上でしょ。

政岡 それは「忍者武芸帳」のことでしょう。『少年マガジン』の「ワタリ」はぼくはつまらないと思うけど、児童まんがじゃないですか？

小室 白土さんの作品にも、いろいろあるが「ワタリ」がつまらないのは、ただ忍者の世界だけを描いていて、白土作品特有の階級の対立といった要素がないからだと思う。もっとも、その歴史の要素を含めたドラマとかテーマがわかるのは高学年だものね。

長谷 私が今興味を持っているのは、赤塚と石森ですね。石森の場合、彼は頭もいいし、腕も立つ。そして彼はSFをずいぶん描いているが、あれは彼の本領じゃないですね。私が望むのは、もっと童話的なもの、低学年の作品向きを描いてほしいですね。

今低学年ものに打ち込もうという作家が少ないので、それをぜひやってほしいし、彼ならできると思うんですが……。

赤塚の場合は、まことに個性的な作家だと思うんです。なにしろギャグだけであれだけのページをこなすのは、立派なものだと思いますよ。それに、彼が作品に対して、とことんまで誠実であるということ、私が彼から一ばんおしえられたのはその点ですね。

永井 石森先生は、ぼくはアイデアのむだ使いが多いと思いますね。ふつうの人なら二、三回に使うものを一度にだしちゃう。

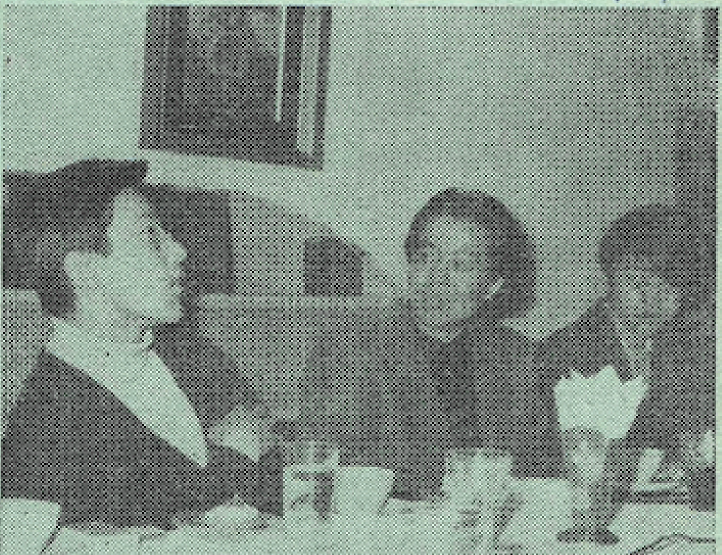
小室 これは要望だけど、石森さんにSFを描いてほしくないですね。彼のSFは、SF雑誌からヒントを取りすぎる。「009」なんかもそうじゃないですか？　けっきょくネームにかける時間が少ないのも、そんなところからきてると思うんです。(笑)

大竹 ぼくは、人間性のある、浪花節的なものが好きなんですが、貝塚先生についていこうと思ってるんですが、今全般的にいえることは、現在のまんが家は駄作を描きすぎると思うんです。

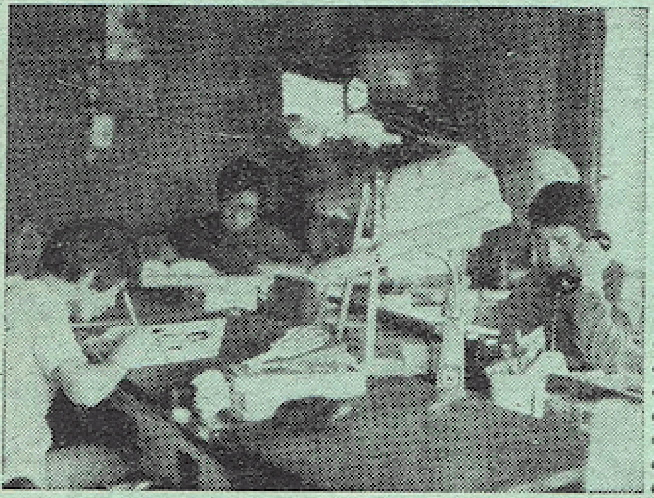
ですから、横山光輝さんのものなんか、何を見ても同じに見えるんです。

村岡 テクニックはうまいと思うんです

既成のものを、ぶち破って 進んでいこう



今のまんが家は駄作を描きすぎる。（左より，大竹，尾崎，村岡）



●ちば氏はアシスタントが将来一人前のまんが家として立てるように仕事を通してアドバイスを与え，彼等のよい素質をひきだそうとしてる。先輩とか先生とかとしてでなく，まんがを描く一友達として，そうしたいそうだ。

がね。

小室　横山さんの場合、現状肯定というか、保守的というか「影丸」を見ても権力を持ってる側がいつも勝ってしまう。その点、白土さんとの差がはっきりしてるんです。

長谷　横山さんには、昔の「魔剣烈剣」とか「音無しの剣」など、単行本当時の作品なんかには、感覚的ヒラメキがあり、気楽に娯楽作品を描いていたと思うんですが、小室くんがいったように、最近のものは保守的になってつまらないですね。

夢は、既成作家を打倒

尾崎　最後に、みなさんが挑もうとなさる、これからのまんがについて、聞かせていただきたいのですが……。

村岡　ぼくは、小説に負けない、おとなも読むにたえるロマン性の強いものを描きたいと思っています。例えば、ぴったりではないんですが「忍者武芸帳」のような人生とか歴史を感じさせるものですね……。

政岡　ぼくに今あるのは、まず描くこと、その中から何かをつかみ、今の既成作家を打倒するという意気込みだけです。その方法論は、今考えているんですがね。（笑）

小室　ぼくは、今の一般的なコマわり以外の方法でまんがが描けるんじゃないかと考えているんです。手塚先生が映画的手法で、かつての「のらくろ」から、ストーリー性をもつ現代のまんがに一変させたようなもの。それを見つけた人々がこれからの主導権を握るんじゃないかと思うんです。

長谷　私は今ぼつぼつ描きはじめてますが、それには赤塚で得たものをストーリーまんがに入れています。でも、児童まんがといえるかどうか……。

大竹　ぼくは、長編を描く前に、三、四年、四コマまんがをじっくりやろうと思っています。

長谷　まんがにユーモアやギャグがはいるのとはいらないのでは大違いで、ストーリーものであっても、まんがである以上ギャグは必要だと思いますね。

小室　たしかに必要だと思うんです。より優れた作品も終止一貫して、ストーリーだけで押すのでは肩がこると思うんです。手塚先生は、その点考え、計算して、ギャグを間にはさんでいるんです。先生の昔の作品ほど、それがよく描かれていますね。それでこそ、まんがたる由縁だと思うんです。

尾崎　今日は、次期まんが家を目ざしてまんが界を背負って立つにふさわしい立派な意見なり夢を聞かせていただきありがとうございました。（おわり）

寸評

尾崎　秀樹

児童まんがのアシスタントというと、私などすぐ、まんが家の卵を思うのだが、どうもそうばかりとはいえないらしい。つまりマス状況が深化するにつれて、児童まんがが自体のマス・プロ化が進み、それに伴って分業が要求され、総合化の側面が強くなる。悪くいえば、アシスタントのサラリーマン化が進む結果ともなりかねない。しかし、それを批判するのはお門ちがいな話で、まんがが創造の企業化を望むマスコミの側に責任を問うべきなのだ。

一将功なって万骨枯る――ということばがある。一人の児童まんがが家が成長してゆくために、どれほど多くの児童まんがが志望家が無名のままで終ってゆくか。アシスタントは個性ある作家の若さとアイデアの供給源にもなりかねないのが現状だが、ここらで、いわゆる集団創造の組織論が、そろそろ生まれてもいいのではないだろうか。

アシスタントとまんがが家の先生と、つまり、それぞれ異った個性をもつ存在が、お互いの違いと共通性を認めた上で、相互に練磨し合う。そんな理想図を思い描くことがあるが、それにしても、もう少しアシスタントに、個人的な勉強の時間を与えてやりたい。これは何もアシスタントに限った話ではなく、量産に追われて生地獄を体験している売れっ子の児童まんがが家全体にいえることで、児童まんがが以外の世界に対しても、幅広い視野を身につけることだ。

その上でなおかつ色あせない児童まんがの創造こそ大事な仕事だといえる。